

# 宿縁

四月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗  
本願寺派

## 中原寺

TEL 〇四七-三七二-〇二九二  
FAX 〇四七-三七二-〇二六一

### 信に生きるとは 我から我らへの道



える人は一選択でしようし、人生の悲哀や矛盾に真剣に立ち向かおうとする人は二選択であろうと思います。

また一は即効性であり対処療法、二は遅効性で習慣化による効用で根治療法であるともとれます。人間は昔から「喉元過ぎれば熱さ忘れる」といいますから、二への道は何人も難しい選択であるといえます

親鸞さまは人生の岐路に立たされた縁を大切に受け止められ、いつてみれば二の選択の道を歩まれたように思います。

親鸞さまが生涯の師と仰がれた法然聖人に出会われたのは二十九歳の時です。その時親鸞さまは、「降るにも照るにもいかなる大事があつても」百日間通われて、徹底して生死いずべき道(確かな安心の道)を尋ねられたといえます。また、その六年後、三十五歳の時「承元の法難(念仏弾圧)」により、不当な罪で辺境の地、越後に流罪となりますが、この縁は辺境の地にある人々にお念仏の教えを伝えるための仏縁と受け取られています。

浄土真宗の教えは信心とは安心(あんじん)とも言います。両方ともまことの心、やすき心です。安らかとは不安をもたない、恐れをもたない、劣等感をもたないことです。安は安定した気持ちで、感情的動揺の激しいのを情緒不安定といいます。信心とは、何かを信じ込んでいるというものはなしに、安心という言葉で表されます。私たちは不安をいただき、いつもびくびくしています。また、いつもつまらぬことをいつて殻の中に閉じこもっています。そういうものが打ち砕かれて広い世界に出、安定した情緒をもっている、そういうのを安心というのです。

そこで信心とは「まことの心」で、私側のものではないことが少しづつ解つてまいります。そこは幾度も幾度も聴聞を重ねてのことなのです。私たちの自性は常に自分が信じなければ、自分が納得しなければという自我の堅い殻に閉ざされているからです。

鶏の卵が外の世界に生まれ出る機能(人間では仏性という)を与えられていても、外からの光に温められてその殻が破られて広い世界に出されるようなものです。

その光の存在に目覚めるのを「阿弥陀如来の本願」に出遇うといえます。まこととは、阿弥陀如来の本願です。あらゆるものを分け隔てなく救うという願いをかけ、その願いが成就した大慈悲心です。ですから「信心」という二字をば、まことの心と読めるなり、まことの心と読む上は、凡夫自力の迷心あらず、まったく仏心なり。(蓮如上人)とあります。

信心とは、如来の真実心を立脚地とすることに目覚めさせられた安らぎと歓喜心です。具体的な心のありようは「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」(歎異抄後序)とある親鸞さまの述懐です。自我に閉ざされていた私という愚かな存在を知らされた内面的自覚です。同時に如来から呼び起される(発願せる世界が「信心に生きる」という念仏者の生きかたとして問われなければなりません。

この前、テレビのドキュメンタリー番組で難民の姿を映し出した光景を見てショックを隠し切れませんでした。紛争の自国の迫害から必死に逃れるためにゴムボートに群がり乗る男や女、子ども、中には兵隊たちにレイプされて妊娠している女の姿。同じ地球に生きるもの同士なのにと思うにつけて、腹立ちとやりきれなさに心がふさがります。

親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫、殺生を生業とする獵師・漁師・商人、さまざまなのは、みな石・瓦・小石のごとくなるわれら」(唯信鈔文意)といわれ、そのいづれをも自己に引きよせて「われら」のこととしています。それはご自身を被支配者としての底辺の民衆のところにおいていたということでした。

親鸞聖人は、時の権力者たちによる念仏弾圧による遠流の後、阿弥陀仏の本願を学ぶにつれて、社会の底辺に生きる民衆の立場にこそ立ち続けていたことがうかがわれます。信心に生きるものは、現実の社会にあつていかに行動すべきか、その社会的実践においていかにあるべきかが、極めて重要な課題になつてきます。

今は亡き龍谷大学の学長を務められた信楽峻磨師は、「真実信心に生きていくということとは、生まれたままの私(我)と、仏法に育てられた私との、厳しい葛藤、闘いだということ。しかしながら、信心に生きるものは、仏に成るべき身といわれることの意味の重さを思うと、少しでも願作仏心(仏と成ろうとする心)・度衆生心(あらゆる人々をすくおうという心)の道を歩んでいくこと」と申されました。それは世俗の価値、体制の論理に搦めとられないようにすることです。

【寺灯雑記】

○宿縁廟並びに彼岸会法要を営む

3/20

暖かな陽光の下、一時から本堂宿縁廟前を荘厳して入廟者の法要が営まれました。このたび新たに分骨をして納められたのは22体、ご遺族はあらためて先人のみ跡を慕いつつ、お念仏が相続されていくよう廟前に誓いました。讃仏偈の読経、参列者の焼香の後、前住さんは「伝わること、伝えることの希薄さが進む今日、宿縁廟建立の趣旨を踏まえてお念仏相続の大切さ」を説かれました。

続いて本堂では春の彼岸会法要がつとめられ、釈尊一代の説法の結びの經典といわれる仏説阿弥陀経を、大勢の参詣者とともに唱和致しました。そして講師の菅原伸郎先生から「カルトと迷信」と題してお話を伺いました。菅原氏はかつて朝日新聞社で論説委員として、また「こころのページ」編集長として活躍されましたが、ちょうど22年前のこの日、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こり、当時新聞記者であったところからカルトと迷信の恐ろしさと思かさについて語りました。そして原始仏典や親鸞聖人の和讃を引いて、仏教における迷信の明確な否定をわかりやすく話してくださいました。

○お釈迦さまのお誕生日を祝う

4/2

今年の釈尊降誕会(花まつり)にはたくさん子どもたちが来て、境内は賑やかに華やぎました。

今回は市内を中心に活動しているキッズダンスのグループ、マーブルチョコの3歳か

ら中学2年の子供たち25名がリズムミカルな恋ダンスを存分に披露してくれました。そして見ている参加の子どもたちも一緒になつて歌とダンスを踊り、楽しい時間を過ごしました。

色とりどりに飾られた花御堂の誕生仏に甘茶をかけてお祝いしたおよそ150名の参加者は、住職さんのお話に耳を傾け、13キロのつきたてのお餅(あんこや黄粉、ごま、納豆、大根おろしの5種類)をいただきながら和やかな雰囲気になりました。

また、花まつりの前に行われた初参式には、昨年8月にお誕生の山本涼葉ちゃんがご両親とお祖母ちゃんに連れられて初参り、阿弥陀さまにご挨拶しました。記念に可愛い式章とお念珠、合掌人形、アルバムなどが授与され、健やかな成長を念じました。

○合同法座で「承元の法難」を学ぶ

4/2

花まつりのあと開かれた婦人会、壮年会合同法座では、念仏が禁止された「承元の法難」の記録を学びました。

旧仏教の比叡山や南都興福寺の僧たちによる法然聖人の念仏教団に対する抗議から始まった朝廷による念仏禁止の弾圧は、4人の僧が死罪、法然、親鸞など8人の流罪という事件へと発展しました。そこにどういふ背景があったのか、またその意味するところを前住さんから学びました。世間法と仏法の関係は私たちにとってとても大事なことで、おろそかにすべきことではないと感じました。

○聞法会館の修復工事が終わる

1月の下旬から工事に入っていた聞法会館の外壁等修復工事が3月末で終了しました。平成16年に完成した聞法会館は早や12年を経過し、メンテナンスの面からこのたび屋上、外壁等の修復工事をいたすことになりました。

工事中は足場や防護網の覆いでご不便をおかけしましたが無事工事が完了しました。ご協力ありがとうございました。

【法座・行事案内】

○入門式

四月十六日(日) 十時

入門式は新たに当寺とご縁を結ばれた方が、浄土真宗門徒として受式していただく大切な門出となるものです。門徒式章と真宗聖典をさしあげます。

○常例法座

四月十六日(日) 一時

正信偈と法話

布教使 熊原博文師(正善寺住職)

○門信徒会役員会

四月十六日(日) 三時半

○和讃に学ぶ

四月二十二日(土) 三時

「源信讃」 前任職

○いのちの居場所を考える会

四月二十七日(木) 十時半

「場の思想」で知られる清水博先生を囲み、共に生きていく原理に向かつて、いのちの居場所を考えてまいります。

○お仏具磨き・清掃奉仕

五月六日(土) 十時

年2回(5月と11月)のお仏具磨きと清掃奉仕日です。お手伝い下さる方は10時までにお出かけ下さい。

○婦人会趣味講座

五月六日(土) 一時

玉子の殻の中にポップリ(乾燥した花や香料)を入れて素敵な置物を作ります。材料は用意してあります。

○仏婦、仏壮交流グラウンドゴルフ大会

五月十日(水) 十時

(参加希望者はお寺まで)

○伝灯奉告法要参拝と北陸の旅

五月十五日(日) 十七日

千葉組第5班の団体参拝に参加です。

○和讃に学ぶ

五月二十日(土) 三時

「源空讃」 前任職

【宗祖降誕会法要並びに永代経法要】

\*日時：五月二十八日(日)

・十一時 親鸞聖人降誕会

讃仏偈と法話①

・一時 門信徒総永代経法要

正信偈と法話②

布教使 蔵田了然師(上宮寺前住)

【四月の掲示板のことば】

目覚めたものは 絶えず他者と共に生きる